

# 古典教育について

尾 沢 喜 雄

On Classical Education

Yoshio Ozawa

1

太平洋戦争の悲惨な終結が我々にもたらしたものは、古い日本への訣別であり、新しい日本の夜明けであつた、と言われていた。このような象徴的な表現から、感得される意味内容は、複雑微妙であつて、受け取る人の心々に応じて、さまざまな色調を奏でるに相違あるまい。併し、実質的には、一時的にもせよ、それまでの日本文化の伝統を停止し、もしくは遮断して、外から与えられたものをほとんど無条件に受け容れることであつた、と称しても過言ではないであろう。

このような事態を推進させる原動力が、国の外部から来る強大な圧力にあつたことは、もとより当然というべきであろうが、国の内部にあつても、敗戦という決定的な事実が、過去の日本のすべての文化に、終止符を与えたものと信じ、深い絶望感に駆られた人々によつて、如上の傾向が一層強くなり立てられたことも、争われない事実であつた。当時における最もすぐれた日本の指導者の一人と目された、東京大学総長南原繁氏が、昭和21年2月11日の紀元節に当り、全学の学生に対して行つた演述によつても、この間の事情は明きらかに知られる。氏はその演述の一節において、太平洋戦争を、日本が自国固有の伝統と精神とを賭けて戦つた戦争である、と断定し、この「戦争において、その精神自体が壊滅した今、何をもつて祖国の復興を企て得るであろうか」とみずから問い、「それは、もはや過去の歴史において求め得ないとするれば、将来において創り出さねばならぬ」とみずから答えているのである。実際国のあらゆる

資源を動員し、これを使い果し、力つきて混乱と迷妄との渦巻く焦土の中に立つた時、誰しもこのような考えに打たれざるを得なかつたことは、我々の記憶に今なお新たなところである。

ともあれ、自己の内に頼るべき支柱を失つた日本が、外から強制され、あるいは導入されたあらゆるものに対して、その善し悪しを見定める余裕や自由もなく、あたかも水に溺れたものが藁をもつかむに至るような心理にかられ、前後の見境もなく、これに縋りつくという惨状を呈したのは、必然の成り行きでもあつたのである。

かかる事態の進行する中であつて、日本の伝統的な文化の象徴ともいうべき古典や、あるいは古典の正しい理解とその授受を担当すべき古典教育が、ひとりそのあるべき地位を確保出来なかつたのも、また当然の結果と言わなければならない。

註：(1) 南原繁著「祖國を興すもの」

2

終戦後、以上のような一般状勢の中にあつて、特に古典や古典教育の地位をおびやかしたのものとしては、大体三つの原因を挙げることが出来ると思う。

その第一は、日本の伝統的な文化に対する不信から発するさまざまな言説であつて、すなわち、短歌滅亡論や俳句第二芸術論のような、伝統的国民文学に対する否定的な批判を始めとして、あるいは日本の古典を旧日本の産み出したものであるという理由の下に抹殺し、これに代

つて、ギリシャ・ラテンを始めとする西欧諸国の古典を現代日本の古典として認めようとする説や、あるいはルネサンスを経ない日本に眞の近代化はなく、従つて、このような条件の下に産み出された古典は、現代の人々にとつては、全く無縁であり、ただ現代文学だけが読むに堪え得るものであるとして、その価値を認めようとする考え方などである。

これらは、日本古来の精神的伝統を全く有害なものとして否認し、西欧近代精神の全面的受容によつて、立ちおくれた日本を眞の近代文化国家たらしめようとする、性急な一群の批評家達が主張したもので、その意図において、必ずしも古典だけを批判の対象としようとしたものではなかつたが、古典軽視の風潮をあおる結果を導いたことは否定出来ない。

第二は、戦時中不当に尊重され、国体の本義の明徴を始めとし、あるいは日本精神の刷新を計り、あるいは皇国民の煉成と皇軍士気の振興を計るなど、戦争遂行の一翼をも担わされていた一群の古典が、敗戦によつて一時にその権威を喪失したことに対する幻滅感である。

これらは古典の偏重と曲解がもたらした当然の結果であるが、古典に対する信頼を失う一つの原因になつたことは争はれない事実であつた。

第三は、日常の言語生活を尊重し、価値ある言語生活を豊かに与えようとする、新しい国語教育の動向であつた。これは、言語文化の習得を通して言語生活の向上を計ろうとした従来の国語教育に対して、新しい道を開くものであつたが、同時に今までの国語教育において大きな役割を果たしていた、古典教育の位置をおびやかすことにもなつたのである。

我々がどのような言語生活を営むかを考え、その生活の向上に必要な能力をつけようとして、新聞・ラジオ・映画の学習が叫ばれ、話し言葉の指導が強化され、現代文学が国語教育課程の中で主要な地位を占めるべきことが強調される状況下にあつて、古典の閑却されるのは自然の勢であつたかも知れない。それは終戦後に

編纂された中学校、高等学校の教科書の中に、従来相当数を占めていた古典教材が、ほとんどその姿を消すに至つたのを見ても明きらかである。

このように、古典は国語教育の内と外からさまざまな原因によつて脅威にさらされ、古典を軽んじ、古典教育をないがしろにする風潮を高めることとなつた。その結果、古典教育は全く濺刺たる生気を失ひ、たゞ従来の情性として、国語教育の一隅に僅かにその地位を保つか、あるいは上級学校の入学試験の準備教育としてしか、その存在の意義を保ち得なくなつたのである。

併しながら、翻つて考えて見るとき、一見古典教育の盛んに行われていたと考えられる戦前又は戦時中においても、はたして正しい古典教育が行われていたであろうか。曾ての中等学校や高等学校が、法令の上でいかように性格づけられようとも、実質的には上級学校へ入学する為の予備校的性格を帯びていたことに変わりはなく、上級学校への入学率の多少がその学校の価値を決定する最大の尺度であつたことを思えば、入学試験準備としての古典教育が、現在と同様に、あるいはより一層盛んに、行われていたろうことも想像にかたくない。(もつとも高等学校においては、優秀な教授によつて、すぐれた古典教育が一部に行われていたことは認めなくてはならないと思う。)そして、それらのほとんど総てが、十年一日の如く、訓詁註釈や単なる言葉の言いかえに終止して、古典の古典たる所以を明きらかにしようとしなかつたことも、むしろ当然のことであつたといえる。また、戦時中の古典教育が時局の波にのる迎合的な相貌しか呈し得なかつたことは、すでに述べたところである。

このように見て来ると、古典教育の盛衰といつても、それは単に国語教科書の上に占める古典教材の量が多いか少いかの差に過ぎず、質的にはこれという変化もなかつたものと言うことが出来る。かくして、古典教育の問題は、新たにしてまた古き問題でもあつたと言えようかと

思う。

註：(1)「八雲」昭和22年1月號座談會 中野好夫・白井吉見「短歌の運命について」

(2)「世界」昭和21年11月號 桑原武夫「第二藝術——現代俳句について」

3

終戦後7年を経過して、終戦直後における混乱も次第に収まり、前途に幾多の困難な問題を控えながらも、ようやく小康を得るに至つた現在にあつては、源氏物語などを先駆とする古典流行の<sup>(1)</sup>声も巷に聞えるようになり、古典教育に関する論議も微かながら各方面に行われるようになった。併し古典教育の正しい樹立はなお今後に委ねられた重要な問題として残されている。曲りなりにも独立の体面を保ち、みずから考え、みずから行うことが出来るようになった我々は、このような古典教育の現状に深く思いをひそめ、その正しい在り方を確立しなければならぬと思う。

しかして、古典教育について考えるべき点は、各方面にわたつて少くないのであるが、古典教育不振の原因が如上の点にかかっていると見られる以上、ここには古典の本質に即して古典教育の意義を考え、古典教育の基礎の確立に資したいと思う。

註：(1) 昭和26年11月10日 東京大學國語國文學會における討論會「最近の古典流行をどう見るか」(司會 成瀬正勝、講師 池田龜鑑・西郷信綱・白井吉見) この討論會は「國語と國文學」昭和27年4月號にもその概要が掲載されている。

4

古典という言葉はもともと支那から輸入されたものであるが、現在においては単にこの語の示す固有の意味ばかりでなく、西欧のクラシクの意味も加わつて、複雑な音色を立てている。<sup>(1)</sup>またその範囲も、単に文学としての古典を意味するだけに止まらず、広く文化百般の事柄を含む古文獻に及んでいるのである。

併しながら、国語教育において単に古典とい

う場合は、日本文学としての古典、すなわち過去のある時代に創作された日本文学の傑作を意味すると考えて差し支えなからうと思う。換言すれば、我々のすぐれた祖先の何人かが、彼等の全力全霊を尽して、人間性の秘奥に探究の鍬を深く打ちこんだ成果であり、その時代の人々が、これによつて、人生の真実を教えられ、人間性の微妙さを知り、自己の実体を自覚し、自己を正しく凝視するなど、その中から大きな精神的糧を得た作品であるということである。

とはいえ、このように単にある時代の傑作であるというだけでは、未だ古典とするに十分とは言えない。それ以後の長い年月にわたつても、時代の変動を貫いて人の心の奥底にひびく強靱な生命力を有し、いわば日本民族の姿をうつす曇りない鏡として、多くの人々によつて尊敬され、愛好された作品をいうのである。古典の本質を規定するものとして、このような不易の生命、すなわちその文化価値の永遠性ということが、第一に考えられなければならない。

古典がこのように歴史の所産としてある時代と深く結びつきながら、同時に永遠性を有するということは、一見不思議な現象といえるかも知れない。けれどその時代を離れてただ永遠の生命に参与しようとするものは、永遠の生命は愚か、一時代の生命さえも得ることは出来ないであろう。無限の生命は有限の時代を根源的に把握するものにのみ与えられる。古典はかかる意味において深く時代に根ざすことによつて、その底を破つて永遠性を把握するに至つたものである。

古典教育とは、古典のもつこのような永遠性を学習者に体感せしめ、過去の貴い文化遺産を正しく継承させることにより、彼等の生活を高く深く豊かにし、よりよき人間形成をなさしめる教育に外ならない。

しかしながら、古典の有する永遠の生命を学習者に正しく把握させることは、決して容易な業ではない。何故かといへば、古典は現在とは異つた歴史的社会的条件の下に制作されたものであるだけに、その用語や文体などにも、現代

では理解しにくい点を多く含むと同時に、その内容においても現代とは遙かに異つた世界、あるいは現代にはすでに失われてしまつた世界の描かれているのが通例である。

このような異つた世界の中から、木霊の如く現代人の心に響き渡る古典の永遠の生命を学習者に把握させようとする為には、まず教授者自身が古典に対する信頼と親愛の情を抱き、これを正しく探求する熱意と努力を持つということが第一要件とならなければならない。古典はたとえ鐘のようなものであろうか。強く打てば強く響き、弱く衝けば弱く鳴るというように、これを探求する人の心に応じて、その真価の發揮を異にするものである。かかる古典の生命を把握した教授者によつてはじめて古典教育はその正しい歩みを始めることが出来るのである。教授者に古典を敬愛し、その生命を把握する熱意なくして、学習者にこれを強要することは矛盾もはなはだしいと言わなければならない。

かかる意味において、古典教育は、究極するところ教授者の古典に対する態度、もしくは古典性の把握如何にかかっていると云つて差し支へないであろう。一切の教育が教授者の如何にかかっていると云えるだろうが、学習者の力だけでは到底理解しがたい古典教育において、一層その感を深くするのである。

註：(1)「文學」昭和13年10月號 岡崎義恵「古典研究の現代的意義」参照

5

今日は、大体において、現代万能主義的な思想の横行している時代である、と云われているように、人は、往々にして現代を偏重するあまり、現代を過去の長所の集積の頂点と考え勝である。その為すべての基準が現代を中心として立てられ、古典に対しても、それが現代意識に適合したものでないと、全く無価値であるというように、その現代的意義を重要視しがちである。古典を抹殺し、あるいは現代文学の価値ばかりを認めようとする、いわゆる古典に対する不信の声は、多くこのような立場から発せられ

たものである。確かに古典を古典として捉える認識の主体は結局現代人の眼でしかあり得ないとも言えるのであるが、古典が古典として考えられるのは、現代の必要あるいは欲求のみに基づいている、という考え方は、あまりにも現代的意義を重視するところから来る謬見と言わなければならない。

現代は必ずしも過去の長所の集積の頂点でもなく、最も進んだ文化の先端でもない。そこには智性の混乱や退化があり、伝統の停滞や遮断が起つている。批判を行い、是正を加えなければならない時代こそ現代であるとも言えるのである。このような現代を無批判に謳歌しようとするところに、一種の断善的態度が濃厚に感ぜられるのである。

古典の中には、時代的傾向を越えた永遠なる人間性の真実を宿しているのであるが、それは現代性というようなものではなくて、むしろ現代が見失つている、ある高貴なものを意味している。このような高貴なものを学習者に教え、文芸復興の意慾を高まらせるところに、古典教育の大きな使命があると言えよう。

もしも現代的なものを求めようとするならば、現代文学によるべきであつて、これを古典に求める必要はないのである。殊に古典をして戦争遂行の一翼を担はしめた戦時中のやり方は、古典の時局便乗を強いるもので、古典に対する冒瀆もはなはだしい。このような意味における古典の高揚は、百害あつて一利なきものと云わなければならない。

6

以上述べた如く、古典の重要な本質は、時代の変動を貫いて流れる永遠性であるが、もう一つの重要な本質として、個体を通して現れる普遍性の一面を忘れてはならない。たとえばギリシャの古典は、それがギリシャ的でありながら、ギリシャという限定を越えて、世界にまで拡充される生命を持つている。シェークスピアやゲーテの作品が、世界的古典としての普遍性を示していることも明きらかな事実である。日

本の古典は、日本語の孤立性や日本文化の後進性などの為、未だ世界的古典としての地位を得るまでに至っていないようであるが、万葉集・源氏物語を始め、西鶴・近松・芭蕉の作品などは、海外の人々によつて早くより着目され、現在においても真摯な研究者が次第に多くなつて行く傾向が見られる。やがて世界的古典として、その普遍性を發揮する日も到来することであろう。このようにすべての民族的古典は民族的なものでありながら、同時に世界的古典となり得る力を持つものである。

日本は明治以降西欧文化の摂取に不断の努力を続けて来た。その結果現在における日本のあらゆる文化が、多かれ少なかれ、西欧文化の影響を受け、あるいはその伝統の上に立っているということは、争われない事実である。日本の将来を想見する時、今後このような傾向はますます強められ、日本文化の伝統がますます西欧的なものに求められて行くことも必至の勢であろうと考えられる。現代日本の古典が、ギリシャ、ラテンを始めとする西欧の古典でなければならぬという論は、このようなところから生じて来るのである。そして西欧の古典は、日本文化に対して強力な規範と目され、いつも畏怖と尊敬の念をもつて迎えられるのが常であつた。このような行き方は、明治以前において、支那の古典に対する場合も同様であつたと言えよう。

外国の古典が自国の文化に摂取され、それによつて自国の文化が豊かさを増大するということは、古典の普遍性から来る当然の結果であり、日本文化進展の上にもむしろ望ましいことであろうと思われる。由来日本文化の特徴として、感性的な方面には非常にすぐれながら、知性的な方面に多くの欠陥を有していることが指摘されていた。古典作品にしても、人間の感情情緒のこまやかな表現において勝り、優美にして艶麗な心情を描くことを得意としているが、その反面、知性思想性の貧困が目立ち、思想的葛藤などを描くことに乏しく、何れかといえば老境的、諦念的な心境を描く場合が多いと云わ

れる。このような点は、西欧古典の摂取によつて、その修正と補強がなされるべきであろうと考えられる。

ただ問題は、日本人がいつも古典を規範として見ることにばかり馴らされて、古典を見るもう一つの重要な道、即ち、古典が曇りない民族自身の映像であるという事実を忘れてしまつたことである。(1)換言すれば、古典を常に功利的価値においてばかり取り上げ、自己を反省する鏡として見る態度を忘れてしまつたということである。古典を自己を反省する鏡として眺める態度は、特に日本の古典に対する態度として最も必要であるにもかかわらず、日本の古典に対しても、外国の古典に対すると同様な態度で臨むこととなるのであつて、このような古典に対する意識は、ある時は古典に対する狂信的な態度となつて表れ、またある時は古典を蔑視もしくは抹殺する態度となつて表れるのである。その表れる方向は異つていても、その基づくところは、古典を功利的立場乃至は現代的意義においてしか考えないという、古典に対する偏見によるものである。

古典教育を行うに当つては、まず日本の古典と外国の古典に対する価値の相違を明きらかにしなければならない。そして、自国の古典に我が民族の曇りない姿を見ることの出来るものにとつてのみ、外国の古典の正しい意義の把握がなされるであろう。自国の古典に対するこのような態度の確立こそ、古典教育の正しい道を開くものと考えられる。

註：(1)「國語と國文學」昭和23年4月號 時枝誠記「國語教育に於ける古典教材の意義について」参照

7

さきにも触れたように、終戦以前の国語教育と新しい国語教育との間には、その目指す方向や方法に著しい相違が見られる。終戦以前の国語教育において中心的地位を占めていた中等学校、高等学校などの古典教材が、新しい国語教育にあつては現代文学や翻訳文学というような

教材に置きかえられ、その結果古典教育軽視の風潮を生じたことも確かであつた。

併し、原理的に見れば、新しい国語教育が、古典抹殺を命じているのでもなく、又古典教育を排撃しているのでもない。ただ、古い国語教育は古典へ到達する為の教育であり、従つて教材を次第に古典に限定しようとする方向を辿つたのに対し、新しい国語教育は古典からの発展の教育であり、古典教材を、言語教材や現代文学の教材などと共に、より広い視野の下に取りあげようとする。従つて、新しい国語教育は、国語教育を古典に限ろうとする、古い国語教育の狭量さを是正しようとするに過ぎないともいえる。

新しい国語教育と古典教育とが反撥し合うように考えるのは、古い国語教育の欠陥を改めようとする性急さによるか、あるいは新しい国語教育を皮相的に解するかして、両者の協力関係を敵対関係に見誤つた謬見にすぎない。我々は確信をもつて、新しい国語教育における古典の地位を確立すべきである。

しかして、古典教育確立の方法は、単に古典教材の増量や、古典教授の時間数増加というような、皮相的な手段によつて達成されるべきものでないことは、以上の所説によつて明きらかであろう。真に古典を敬愛する熱意に燃え、古典の生命を把握し、古典教育の正しい在り方を理解しつゝ、この道に専念する教授者によつてのみ、古典教育の大道が開かれ、その成果が挙げられることであろう。

以上私は古典の本質に即しながら、古典教育の正しい在り方について述べると共に、古典教育をはぶむ主な原因についての批判をも試みた。古典教育の焦点がどこにあり、如何にすれば古典教育を盛んにすることが出来るかは、ほぼ明きらかにされたことと思う。なお古典教育の具体的方法についても問題は少くないが、これらは古典教育の基礎が確立すれば、おのずから解決されるべき問題と思われるのでこれを省き、最後に芭蕉の「奥の細道」の一節平泉の条を鑑賞して、具体的に古典教育を行う上の参考に供したいと思う。

芭蕉の「奥の細道」の中でも、平泉の条下は最も精彩ある箇所ということが出来るであろう。松島や象潟の描写も捨てがたい趣があるし、市振の宿の遊女に関する物語もあわれは深いのであるが、平泉を叙した精彩ある筆致には及ばないように思われる。その本文を挙げれば次の如くである。

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。先づ高館にのぼれば、北上川南部より流るる大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡等が舊跡は、衣が關を隔てて南部口をさし堅め、夷を防ぐと見えたり。俗も義臣すぐつて此の城にこもり、功名一時の叢となる。国破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠うち敷きて時のうつるまで泪を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房みゆる白毛哉 曾良

豫て耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散りうせて、珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚の叢となるべきを、四面新に圍んで藁を覆うて風雨を凌ぐ。暫時千歳の記念とはなれり。

五月雨の降りのこしてや光堂

「三代の榮耀一睡の中にして……」と、藤原氏三代の榮華の跡をとぶらうところから始まるこの一篇の抒情詩は、やがて高館における感慨へと移り、「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、懐古の涙を流しながら、「夏草や兵どもが夢の跡」の強い咏歎に高まつて行き、更に転じて經堂や光堂にその上の華やかさをしのび、「五月雨のふりのこしてや光堂」の句に最後の深い余韻を響かせて終つている。

珠玉のような美しい言葉が、簡古雄勁なリズムを奏でながら、惻々として心に沁み入る情感を湛えている様は、限りなく寂しくもまたあわれである。

を放つに至つた理由は、何処に求められるべきであろうか。

言うまでもなく、芭蕉が平泉の廢墟に立つて感得したものは、榮枯盛衰のはかない夢であり、人生流転の嚴肅な姿であつた。そして、そこから發する哀感が全体に漲り渡つて、この一篇を活々と躍動させていることも、争われない事実である。「奥の細道」の冒頭に、「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人なり」と道破し、また「古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやまず」と説き、世界を無常流転の相においてながめるとともに、その中に旅人としての一生を終えようとする芭蕉にとつて、平泉はまさに好箇の詩材を提供するものであつたに相違ない。これに触れて、芭蕉の詩心は異常に高揚され、美しい詩品がおのずからにして形成されたと考えられる。

このようにして、平泉一篇の主題は、同時に「奥の細道」全体の主題に連なるものでもあつた。言葉をかえれば、「奥の細道」の最初に奏でられた全篇の主題が、音色をかえて再びここに響き出したとも言い得るのである。

10

併しながら、このような見方は、平泉における芭蕉のあり方の一面を伝えるものではあつても、その全面を物語るものではあるまい。確かに芭蕉は平泉を流転の相において捉えてはいるけれど、流転し行く平泉の中に永久に流転しないものを求めて、これに限りない憧憬と思慕を寄せていることも見逃してはならない。芭蕉のこのような心情は、高館に立つた感慨の中にもその微かな揺曳を見せているのであるが、特に光堂に関する記述において、すべてのものの滅んで行く中に、僅かに頽廢を免れて、今に至るまで燦然たる光彩を放ち続けるこの堂宇に、古き代の面影をまざまざと認めつつ、異常な感慨を籠めて、「五月雨のふりのこしてや光堂」と詠つているところに、最も端的に現れている。

平泉の廢墟に佇んで、これを流転し行く相と

して眺める芭蕉と、流転するものの中にあつて、流転しないものを思慕する芭蕉と。そこには異つた二つの芭蕉の姿が認められる。しかもその二つが矛盾することなしに融合し、高く澄み切つているところに、平泉条下における芭蕉のまことの姿があつたといえる。

11

世界を無常流転の相と観ずることは、人間無力の思想の一つの現れであり、虚無の深淵に通ずる道でもある。このような世界観を抱きながら、なおも流転するものの中に流転しないものを求めようとすることは、如何にも矛盾した事柄と言わなければならない。併しこの二つが矛盾として感じられないばかりか、むしろもう一段高い立場において統一されて、芳しい芸術の香りを放つているのである。このような関係は独り平泉の条下ばかりでなく、「奥の細道」を始め芭蕉作品の全体を掩う性格でもあつた。ではその立場は何かと言え、つきつめた無常観の寂寥所において体得された、人間の精神の眞実な営みに対する不滅性の自覚に外ならない。世界が流転し、人間も流転し行く小さな一つの対象に過ぎないということは、寂しさの極みであるが、その寂しさに徹する時、すべてのものがどのように流転しても、人間の眞実な心の営み——誠、愛、文化等——は永久に滅びないという自覚が湧いて來たのである。否、そう確信しないではいられなかつたといつた方がより適切かも知れない。芭蕉は、この自覚と確信の上に立ち、「その細き一すじ」の道に生涯をささげて悔いることがなかつたのである。

12

人間の眞実な心の営みは果して永久に滅びないものであろうか、これは人類にとつて未解決の大きな課題であるにちがいない。しかしながら、その不滅性を信ずることなくしては、眞の精神文化が一步も築かれぬことも確かであろう。この確信を万物流転の寂寥な相の中に捉え得た芭蕉は、人間精神の到達し得る最高の境地

に至り得た人とも言えるのである。

このように一見無常を咏歎するに似て、遙かにこれを越える孤高の精神に生き、真実な人間精神の不滅性を追求して一生を旅に終つた漂泊の詩人芭蕉の姿は元祿時代の当時にあつて、どのように尊くもまた清らかであつたことであろうか。全国の俳人が翕然として蕉風に帰したのも故なきにあらざと考えられる。が、それ以後の時代にあつても、絶えず人々の憧憬の念をかき立てながら現在に至つている。そしてこのような美しい精神が一敗地にまみれた焦土の中か

ら新文化国家を建設しようとする我々の心にひびきあい、新日本の行く手に、ほのぼのとした光明と確信と鼓舞を与えてくれるのである。

かかる、芭蕉の高貴な精神を美しい「奥の細道」の文章を通して正しく学習者に感得させるところに古典教育の正しい道が存するのである。

〔附 記〕

本稿は昭和27年10月20日21日の兩日岩手大學において開かれた文部省主催の東北地區國語教育研究協議會の席上で行つた講演の概要である。

A B S T R A C T

Sudden check given to the stream of the Japanese cultural tradition and unconditional adoption of what is given from without—these are the two main features brought about by the catastrophe of the world war II. Under these unfavorable conditions, it is quite natural that Japanese classical education has suffered from helpless lethargy. But the sluggishness of classical education is not a new state that has begun with the end of the war. Even before and during the war, the education remained quite superficial. The problem of classical education, therefore, is old as well as new to our nation, and this is what makes it necessary for us to find and establish the right way of classical education.

When we speak of a classic in reference to the education of the Japanese language, we mean by it a masterpiece which was created in a certain period in the history of Japanese literature. It is a literary work which not only served as mental pabulum to sustain the spiritual life of its contemporaries, but also has continued ever since to enjoy an immortal life. The

primary objective of classical education is to make students realize this immortality of a classic and rightly inherit the noble tradition of the past culture. And it is only those teachers who combine passion and proper understanding of classics that can attain this objective.

Nowadays we are apt to lay too much stress upon the value which a classical work has in the present age. But the present age, far from being the apex of the pyramid which is formed solely by the good things in the past culture, contains lot of things to be criticized and rectified. The immortality of a classic is not the same thing as its modernity. It rather means something noble which the modern age has lost. To let the modern people find out this noble thing, to elevate their mind, and to correct the errors of the modern age—these are the missions of classical education.

A classic is universal as well as immortal. It is something racial, but, at the same time, it is endowed with power which enables it to be a global classic. It is this universality of a classic that makes the



adoption of foreign classics possible, as is exemplified by the Japanese nation who has made constant efforts to introduce the western culture through the studies of its classical works ever since the Meiji era. But our attitude toward our own classical works, as is naturally expected, should differ from our attitude toward foreign classics. Classical education will become sound and healthy when we regard our own classic as a clear image of our race itself and attach importance to self-examination through classical studies, while we regard a foreign classic as a norm and lay emphasis on its modern value.

New language education greatly differs from the old one in its direction and methods, but even the new education dare not, in principle, exclude classics from language education. It only accuses the old education of its narrow-mindedness when the latter was desperate enough to confine language education to classics alone. The urgent need of the moment is to know the true character of new language education and give a proper position to classical education in the whole scheme of language

education.

Thus far I have discussed some of the essential points in the theory of classical education. Now I am going to give an appreciation of a paragraph in Bashō's journal entitled "Oku no Hosomichi" (=Narrow Passages in North East Japan) as an illustration. In this paragraph the author describes a historical village of Hiraizumi. Here we find two Bashōs. One is a Bashō who sees the village of Hiraizumi in its aspect of inconstancy and vicissitudes, and the other is a Bashō who, with a profound yearning, seeks for what is eternally constant in Hiraizumi which is constantly changing. But these two Bashōs are fused into one without any contradiction and form a single flawless personality, for it is confirmed by the consciousness of immortality which the true life of human spirit enjoys so long as it is a human spirit which has realized itself in the lonesome word of absolute inconstancy. The high way for classical education will be paved when the students are made to realize this noble mind of Bashō's.